

『真帝再臨 騎士団長哀刻供犠』より第一話

著者：金目

## 目次

登場人物紹介

第一話 亡国の騎士団長パートラム

(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

第二話 供犠の印 (淫紋)

第三話 雄のチャクラ解放 (乳首責め)

第四話 帝王にふさわしきペニスを (尿道責め、巨根化)

第五話 エナジーを高め (アナル責め、玉責め)

第六話 他の雄を糧とし (フェラチオ、飲精)

最終話 そして供犠は成る (射精、人格乗っ取り)

### 【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

## 登場人物

### バートラム

亡国ヘンダールの騎士団長。28歳。真帝エルディオ復活に国の再興を託す。

### カダリス

放浪の賢者。真帝エルディオ復活のために、バートラムに淫猥な試練を課す。

### アダン、ソロス、ロシェ

バートラムの部下の騎士たち。

## 第一話 亡国の騎士団長バートラム

帝都ガストラの広場には大勢の人々が集まっていた。

若い者から老いた者まで、多くの男女が広場に集まり、広場の中央の舞台に注目していた。

近くの者は地べたに座り、建物の窓から身を乗り出す者は双眼鏡で舞台に注目している。

帝都の民たちが見ているのは舞台の中央に晒された全裸の男だ。

目鼻がすっとした凛々しい顔立ちに無駄をそぎ落とした凄みのある筋肉。

男という生き物の美を突き詰めたと言っても過言ではないその男の名はバートラム。

帝国によって滅ぼされた王国のひとつであるヘンダール王国の騎士団長だ。

並の男ならば、敵対していた国の民たちの視線に全裸で拘束されている現状に心細さに震えていただろう。

けれど、バートラムは違った。

身を守る鎧一つ、人並みの大きさの包茎チンポを隠す布一つない無防備な状態だというのに、バートラムは完全武装さながらの気迫を持って、敵地の人間である帝都ガストラの民たちを力強く睨みつけていた。

「亡国の騎士団長バートラム。

命乞いの準備はできたかな」

三角兜を被った処刑人の言葉が帝都ガストラに響き渡る。

処刑人に与えられた三角兜の魔力により、処刑人の言葉は帝都ガストラのどこにいても適切な音量で響くようになっているのだ。

その処刑人の言葉に、帝都ガストラの民たちが四方八方から歓声を響かせる。

厳しい身分制度が敷かれている帝国において、民たちの唯一の娯楽といえば、征服地の高官の処刑しかないのだから仕方がないが、その光景は投げ入れられた肉に群がる飢えた犬

の様相としかいいようがなかった。

帝都ガストラの民たちの醜い有様にバートラムも顔を歪めた。

「命乞いなどせぬ！」

たとえ一時祖国を踏みにじられようとも、我らヘンダールの民は必ずや悪しき帝国を打倒する！」

バートラムが騎士団長としての誇りを胸に、処刑人の言葉に反論をした。

その堂々たる様子は捕らわれの身とは思えないほど堂々とした様子であった。

だが、帝都ガストラの民たちはそんなバートラムの様子に心を動かされる様子もない。

周辺諸国を征服し続けている帝国にとって、征服地の高官の処刑は珍しいものではなく、その中にはバートラムのように気骨のある様子を見せる者もいたからだ。

そして、そのように気骨を失わない者の心をへし折り、命乞いをさせる過程こそが、帝都ガストラの民たちの娯楽なのだ。

「命乞いなどせぬ！」

そんなことを言ってナイフ一つ持たない身体でどうやってどうするのだ！」

処刑人の言葉に、帝都ガストラの民たちが声を上げて笑う。

バートラムは騎士団長らしく彼らの嘲笑に耐えた。

「いや、ここにナイフがあったな」

処刑人が杖でバートラムのチンポをつついた。

「この人並みのナイフならば、娼婦一人程度ならば殺せるかもしれぬなあ。

ああん、死んじゃう死んじゃうううう」

処刑人がわざとらしく身体をくねらせた。

「こんな粗末な包茎チンポじゃあ、イけなくて死んじゃうううううう」

処刑人の言葉に帝都ガストラの民たちが嘲笑を重ねる。

処刑人たちの嘲笑にバートラムは顔を赤くした。

バートラムは己の包茎チンポをコンプレックスに思っている。

部下の騎士たちが露茎しているのに対し、バートラムだけが包茎ということが恥ずかしくて仕方がなかったのだ。

それをこんな風に笑われても平然としていられるほどバートラムの心は血の通わない鋼ではなかった。

「で、実際のところ、この包茎ナイフは女を殺したことはあるのかな」

処刑人がバートラムのチンポを杖でつつきながら問いかける。

「答える必要はない！」

バートラムは処刑人の質問に語気を荒げた。

「答える必要はない！」

なぜなら童貞だからあ！」

処刑人がバートラムの言葉を繰り返して余計な言葉を付け加える。

四方八方からバートラムに向けて嘲笑が浴びせかけられる。

バートラムは歯を食いしばった。

バートラムが童貞だというのは真実だったからだ。

バートラムは騎士団長の務めに励むあまり、妻との関係が冷え切っていた。

だから、妻と臥所を共にしたことはなかった。

加えて、バートラムは娼婦と夜を共にしたこともない。

部下たちが娼婦と夜を共にしていることを咎めたことはないが、バートラム自身は娼婦に対して抵抗を捨てきれなかった。

そうした私生活を嘲笑われている気がして、バートラムは悔しさに歯ぎしりをした。

「そうだなあ。

女を知らない哀れなバートラムくんこれを使わせてあげよう」

処刑人が筒状の道具を取り出した。

「哀れなバートラムくんに教えてあげよう。

これは、お前のような独り身の男のチンポを包んで射精へと導く道具なのだ」

処刑人がバートラムの目の前に筒状の道具を突きだした。

柔らかく潤んだ内壁に勃起チンポを突っ込めば、確かに気持ちよさそうだとバートラムは思った。

「だから、お前が望むのならば処刑前に使わせてやってもいいぞ。

お願いします。

愛するあの人のアソコに見立てて情けなく腰をへこへこさせますので、バートラムの哀れな包茎チンポを脱童貞させてくださいませ。

って言えたらなあ！」

処刑人の言葉に帝都ガストラの民たちが笑いだした。

バートラムの心に義憤の炎が燃え上がる。

愛する祖国を踏みにじっただけではなく、騎士の誇りを辱めるようなことまで要求する彼らの野卑な心への怒りが込み上げてきたのだ。

「断る！

たとえ処刑されようとも、ヘンダール王国騎士団長のこのバートラムが貴様らの愉悦の糧となることなどはない！」

バートラムが己の誇りを口に乘せて一喝すると、笑い続けていた帝都ガストラの民たちが黙り込んだ。

帝都に一瞬だけ沈黙が訪れた。

「愚かな」

処刑人が冷たい声音で呟いた。

「我ら帝国の虜囚となった貴様は、その血肉の一片に至るまで我らの愉悦の糧だ。

そのようなことも理解できぬ頭であったとはな」

処刑人の手がバートラムの首に伸びた。

その手で絞殺されるのだらうと、バートラムは覚悟を決めた。

どの道、祖国を滅ぼされた時点でバートラムの人生も終わったようなものなのだ。

たとえこの場で処刑されようとも、ヘンダール王国の誇りを示すことができたのならばそれだけでこの人生に意味があったと言えるのだ。

だが、処刑人の手はバートラムの首に触れなかった。

胸板に触れ、ゆっくりと手が引き締まった腹筋の方へと降りていく。

何をされるのか分からず、バートラムはその手を目で追いかけた。

処刑人の手がへそを越えて、バートラムの無防備な下腹部へと降りる。  
バートラムの人並みの包茎チンポを飾る陰毛を撫で、そのまま両手でチンポを包み込む。  
……まさか！

悪い予感がしたバートラムは歯を食いしばった。  
ギイイイイイイイイイウウウウウウウウ！

「うぐううううううううううううううううう！」

金玉を処刑人の手で力いっぱい掴まれ、バートラムの口から苦悶の声が溢れ出た。  
頭の中で痛みが爆竹のように次々と弾けて、バートラムの心を苛んでいく。

処刑人の逞しい腕に血管が浮かび上がる。

それだけの強い力で金玉を握られているのだ。

バートラムが並の男ならば、これだけで泣き叫び、悶絶していたに違いがない。

けれど、バートラムは苦悶の声こそ上げてはいたが、ヘンダール王国騎士団長の誇りを胸に必死に耐えていた。

たとえ、身体と命を弄ばれようとも、決して心までは屈しない。

死ぬことになったとしても、この悪しき帝国のおぞましき民たちの愉悦の糧とはならない。

その決意を胸に、バートラムは歯を食いしばって必死に耐えていた。

バートラムの全身から脂汗が流れ始める。

拘束されているバートラムの手足の指がブルブルと痙攣している。

処刑人の手がギチギチとバートラムの金玉を締め上げる。

ゴリュッゴリュッと処刑人の手の中でバートラムの金玉が嫌な音を立てる。

バートラムの食いしばった歯の間から苦悶の息が漏れる。

処刑人の手が、バートラムの金玉から離れた。

「ひいーひいー」

苦痛から解放されたバートラムは荒い呼吸を繰り返す。

「さあ、バートラム。

我らに懇願するがよい。

愛するあの人のアソコに見立てて情けなく腰をへこへこさせますので、バートラムの哀れな包茎チンポを脱童貞させてくださいませ、とな」

処刑人がバートラムに服従の言葉を要求する。

一瞬だけ、バートラムは考えてしまった。

処刑人の様子から察するに、バートラムが彼らの愉悦に服従しない限り、無慈悲な玉責めが続くだろう。

ならば、彼らの愉悦の糧になってしまった方が楽なのではないか……

いや！

バートラムは己の弱気に首を振った。

バートラムはヘンダール王国の騎士団長だ。

その背には、帝国との戦争によって踏みにじられたヘンダール王国の民たちの無念が積み重なっているのだ。

そのバートラムが帝国の邪悪な民たちの愉悦に屈しては、ヘンダール王国の民たちの無

念はどうなるというのか。

「断る！」

バートラムは決意を込めて処刑人の誘惑を拒んだ。

「そうかそうか。

まだ分からぬか」

処刑人が籠手に手を通し、バートラムに掌を見せた。

籠手の掌には、突起が無数に浮き上がっている。

処刑人がゆっくりと指を開閉した。

その掌で金玉を握られたのならば先ほどよりも激しい痛みに襲われることは容易に想像がついた。

バートラムは歯を食いしばり、指を強く握りしめ、襲い掛かる激痛に備えた。

悲鳴を上げるまい。

帝国の邪悪な民たちの愉悦の糧になどなるまい、と決意を込めて。

処刑人の手がバートラムの金玉を掴む。

玉袋に籠手の冷たさが伝わった。

「ぎああああああああああああああああああああああ」

籠手による玉責めはバードラムの決意を容易く打ち砕いた。

籠手の突起が金玉を押しつぶし、押しつぶされた金玉の断末魔がバートラムの喉を震わせる。

バートラムの全身から滝のように脂汗が流れ、バートラムの鍛え上げられた肉体が被虐の艶に濡れていく。

バートラムの凜々しい顔は苦悶に歪み、涙と鼻水が溢れ出る。

バートラムは脊髄を振じられているかのような鈍痛に首を振った。

首を振ることで少しでも激痛を逃がそうとしたのだ。

帝都ガストラの民たちが肉眼で、双眼鏡で、バートラムの苦悶の表情を鑑賞している。

生意気な騎士団長が処刑人の手で悶えている様子に愉悦の笑みを浮かべ、ある者は食事をし、ある者はうっとりとした顔をしている。

バートラムは激痛を堪えるために必死に叫び続けている。

けれど、その叫びと苦悶の表情はバートラムの決意とは裏腹に帝都ガストラの民たちの愉悦の糧となっていた。

ゴリユリユリユゴリユリユと処刑人の籠手の中で変形せんばかりにバートラムの金玉が揉まれ、押しつぶされる。

その苦痛に、バートラムの顔は苦悶に歪む。

「あああああああ、がああああああああ、ぎあああああああああああああ」

バートラムは金玉を責められる苦痛を少しでも緩和しようと叫び声を上げ続ける。

処刑人の籠手がバートラムの金玉から離れた。

「ひiiiiiiiiii……ひiiiiiiiiii……」

バートラムは情けない声を上げながら呼吸を繰り返し、身体に溜まった苦痛を逃がそうとする。

四肢を拘束されていなければ、バートラムは両手で金玉を覆い、処刑人や帝都ガストラの

悪しき民たちの視線から守ろうとただらう。

バートラムの額には脂汗で前髪が張り付いている。

バートラムの目は苦痛に潤んでおり、男として最悪の苦痛である玉責めがどれほど凶悪なのかを如実に示している。

「さあ、バートラムよ。

我々が何を望んでいるか、はっきりと分かったはずだ。

下らないプライドを捨てて、童貞を卒業したいと浅ましく求めるがいい」

処刑人の言葉にバートラムは即答できなかった。

籠手による玉責めの苦痛は凄まじく、再び玉責めを味わわされることへの躊躇いがバートラムの口を重くしたのだ。

バートラムの心の中で天秤が震える。

一方の皿にはヘンダール王国騎士団長としての誇りが乗せられ、もう一方の皿には己の安寧が乗せられる。

祖国を蹂躪されたとはいえ、バートラムは栄誉あるヘンダール王国騎士団長だ。

その振る舞いは、祖国の民たちの誇りであり、希望であり、再起の日を待ち望む国民たちを鼓舞するものでもあるのだ。

だというのに、己が処刑人の拷問に屈したのでは、バートラムを信じる民たちの希望を踏みにじることになるだろう。

その一方でバートラムの生存本能はこれ以上の玉責めなど受けたくないと言主張する。

民たちがバートラムに何をしてくれるのだろうか。

民たちの今後について、どうあがいても処刑される未来しかないバートラムが責任を持つ必要があるのだろうか。

どうせ処刑されるのなら、なるべく楽に死ぬるように振る舞った方がマシなのではないか。

バートラムの天秤の皿が上下に揺れ続ける。

己の誇りと安寧のどちらか一方を選べないバートラムの唇がわなわなと震える。

誇りを選び苦難に溺れるか、服従を選び民たちの期待を裏切るか……

バートラムは悩んだ。

最初のように即答などできなかった。

それほどまでに、玉責めへの恐怖がバートラムに押し掛かっているのだ。

バートラムの脳裏にヘンダール王国の民たち、そして、敬愛する国王陛下と信頼する部下たちの顔が浮かぶ。

裏切れない……

悩んだ末にバートラムの天秤は静止した。

「断る。

何度辱められようとも、この俺はお前たちの愉悦の糧とはならん！」

バートラムは震えそうな己の心を叱咤する意味も込めて語気荒く叫んだ。

処刑人がバートラムをじっと見つめる。

バートラムは歯を食いしばった。

いかなる玉責めにも耐える決意を固めて全身に力を入れた。



だが、処刑人は動かない。

バートラムは動こうとしない処刑人に不気味なものを感じた。

「そうかそうか」

処刑人が大げさに頷いた。

「どうやら貴様には、玉責めでは足りないようだな」

処刑人が腰に巻いたベルトから鋏を取り出すと、バートラムの目の前でチャキチャキと刃をかみ合わせる。

「これから、お前の粗末なペニスを切り落とす」

処刑人の言葉にバートラムは恐怖のあまり唾を飲み込んだ。

「そして、残されたお前の金玉に性欲増進剤を限界まで投与する。

どうなるか分かるかな」

処刑人が何を言いたいのか、バートラムには分からない。

「射精したくて仕方がなくなるのだ。

恥も外聞も忘れて衆目であろうともシコシコしたくなるのだよ。

だが、ペニスがなければどうなると思う？

シコシコする部位がない以上、快樂を得ることはできない。

決して満たされぬ欲求に溺れて喘ぎ苦しむことしかできなくなるのだ。

その様は、愉しいだろうなあ」

処刑人が語るあまりにも悪辣な未来に、バートラムは恥辱と怒りに震えた。

「ふざけるな！

殺すなら一思いに殺せ！」

「貴様は我らの愉悦だ。

殺せと言われて殺すわけがないだろう」

処刑人がバートラムのペニスを掴み、反対の手で鋏をチャキチャキと鳴らす。

バートラムの包茎ペニスは切除される恐怖から縮こまっている。

「さあ、お前の粗末なペニスにお別れを言う時間だぞ、バートラム」

処刑人がバートラムの陰茎の根元に大きく広げた鋏を押し当てる。

バートラムはペニスを切除される恐怖に耐えきれずに目を閉じた。

ジャキッ！

鋏の歯をかみ合わせる音がバートラムの耳に届いた。

ペニスを切り落とされたと思ったバートラムの下腹部がキュンと締まる。

じょろろろろろろろろろろ……

失禁し、尿を垂れ流す感覚に、バートラムは己のペニスが無事であることを悟った。

「おやおや、バートラム。

これはなんだろうなあ」

処刑人が放尿を続けるバートラムのペニスを摘まみ、左右に振る。

その動きに合わせて弧を描く尿が左右に揺れる。

「栄えあるヘンダール王国騎士団長がいい年をしてお漏らしなどして、恥ずかしいなあ」

処刑人の言葉に帝都ガストラの民たちが下品な笑い声をあげる。

「ヘンダール王国には、放尿を見せる習慣でもあるのかなあ。

いやはや、野蛮なことだ」

「外道が！」

処刑人の言葉にバートラムは怒りに震えた。

「では外道らしいことをしようか。

今度こそ、粗末なペニスとお別れだ、バートラム」

処刑人が放尿を終えたバートラムの包茎ペニスを振ると、再びバートラムの包茎ペニスの根元に鋏を押し当てた。

「さようならー、さようならー。

バートラムの、粗末ペニス！」

処刑人が下手な歌を歌いながら身体を左右に振る。

帝都ガストラの民たちも処刑人の歌に同調し、歌いだす。

バートラムは、己がまともな男でなくなるという恐怖に全身が震えそうだった。

けれど、せめて誇りは抱いていた。

その決意を胸に、バートラムは歯を食いしばり、処刑人を見据えた。

「終わりだ、バートラム！」

処刑人がバートラムの包茎ペニスを挟んだ鋏に力を入れた。

と同時に、バートラムの周囲に煙が溢れ出た。

「なんだこれは！」

声を荒げる処刑人の手元から鋏が落ちる。

処刑人が兜の口の部分を手で覆い、咳き込み始める。

煙は晒し台から広場に広がり、バートラムの拷問を見物していた帝都ガストラの民たちも咳き込み始める。

だが不思議なことに、バートラムだけはその煙を吸っても咳き込まなかった。

「団長、助けにまいりました」

「その声はアダンか！」

煙の中からかけられたその声は、バートラムにとって聞き覚えのあるものであった。

アダン。

バートラムの部下の一人で、バートラムと同じ都市の出身だ。

「そうです。

賢者カダリス殿の助けで、この場へと参りました」

「賢者カダリス？」

聞き覚えのない名前を告げられ、バートラムは不思議に思った。

少なくとも、ヘンダール王国では聞いたことのない名前だったのだ。

「詳しい話は後でいたします。

手足の拘束を解いたらこの場を離脱します」

アダンがバートラムの拘束を手早く解いていく。

晒し台から解放された全裸のバートラムにアダンがマントを被せる。

「カダリス殿、お願いいたします」

アダンの声と共にバートラムとアダンの身体が光りはじめた。

「待て、逃がさぬゲホゴホッ」

処刑人の手がバートラムに伸びようとする。

「邪魔をするな、外道！」

アダンの剣が閃き、処刑人の手が切断される。

「ぎゃあああああああああ！」

処刑人の悲鳴が煙の中から響いた。

煙が晴れたとき、帝都ガストラの民たちが見つけたのは、バートラムがいなくなった晒し台。そして、肘から先を失い、悲鳴を上げている処刑人の姿であった。

「無能な処刑人を処刑しろ！」

帝都ガストラの民の一人が叫ぶと、その声はあっという間に大音声となって帝都ガストラに響く。

騒ぎを聞きつけた処刑人仲間が腕を失った処刑人を晒し台に固定していく。

そして、主役を変えた残虐な宴が再開された。

暴虐に飢えた帝都ガストラの民たちはバートラムのことなど気にもしなかった。

この帝国に逆らって無事で済む者はいない以上、いずれは晒し台に戻ることは明らかであったのだ。

## 奥付

『真帝再臨 騎士団長哀刻供儀』より第一話

初出：2021年1月22日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

[https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker\\_id/RG01002299.html](https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html)

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

[https://twitter.com/chigaya\\_deep](https://twitter.com/chigaya_deep)